



**Data**

監督: 大森立嗣  
 原作: 三浦しをん『光』(集英社文庫)  
 出演: 井浦新/瑛太/長谷川京子/橋本マナミ/南果歩/平田満/梅沢昌代/福崎那由他/紅甘/岡田篤哉/早坂ひらら

■■■ショートコメント■■■

◆公式ホームページによれば、本作のイントロダクションとストーリーは次の通りだ。

## Introduction × Story

三浦しをん、善悪の彼岸へ。  
 圧倒的暴力を描く衝撃作、ついに映画化。

「角を編む」で本匠大賞を受賞した三浦しをんの作品群で、徹底的に人間の闇を描き、ファンの中で特別な評価を得ている一作、「光」が『さよなら渋谷』、『まほろ駅前』シリーズの大森立嗣監督の手によりついに映画化となる。かねてからの観演を望んでいた井浦新、瑛太のふたりの狂気と怪物性、そして長谷川京子、橋本マナミの気配と母性がスクリーンに吸い込まれるような情熱を放つ、苛烈なる人間ドラマがここに誕生した。

**「野性」に踏み出してしまった「人間」の姿——。**

25年前に消滅したはずの秘密を握って、今日彼は笑って現れた。

東京の摩島、美浜島。中学生の信之は記憶的な暮らさが続く中、閉塞感のある日々を過ごしている。美しい恋人の美花がいることで、毎日は彼女を中心に回っていた。信之を慕う年下の輔は、父親からはげしい虐待を受けており、誰もが見て見ぬふりをしていた。ある夜、美花と符ち合わせをした場所、信之は美花が男に犯されている姿を見る。そして信之は美花を救うために男を殺してしまう。その夜、理不尽で容赦ない天災が島に襲いかかり、すべてを消滅させた。生き残ったのは、信之のほかには美花と輔とろくでもない大人たちだけだった。それから25年後、島を出てバラバラになった彼らのもとに過去の罪が迫ってくる。妻子とともによき父として暮らしている信之と、一切の過去を捨ててきらびやかな芸能界で貪欲に生き続ける美花。誰からも愛されずに育った輔が過去の秘密を携え、ふたりの前にやってくるのだった。

◆原作が三浦しをん、監督が大森立嗣、そしてW主演となる2人の俳優が井浦新と瑛太と聞き、大いに期待。大森監督の『さよなら溪谷』（13年）は実によくできていた（『シネマルーム31』24頁参照）し、同作における大森監督の女優・真木よう子の演出は抜群だっただけに、本作でも長谷川京子と橋本マナミという2人の女優の演出にも大いに期待！

◆本作のテーマは、「日常の中に潜む暴力性」。そのため「男たちの狂気」が野性的に展開するらしい。なるほど、なるほど……。本作冒頭に出てくるのは、とある島の中で生活する中学生の黒川信之（福崎那由他）と中井美花（紅甘）。そして、小学生の黒川輔（岡田篤哉）による殺人事件。三浦しをんの原作にこんなものがあるの……？そう思っていると、ある日この島を津波が襲い、島はほぼ全滅。そして、一転して時代は25年後に。

すると、今は35～40歳になってるはずの黒川信之（井浦新）、中井美花（長谷川京子）、そして、黒川輔（瑛太）という、幼なじみだった3人の男女は……？

◆信之は今、市役所に勤め、団地の中で妻、南海子（橋本マナミ）と一人娘、椿（早坂ひらら）と共に幸せそうな生活を営んでいた。しかし、それはあくまで一見だけで、その実信之の心の中は複雑そう。夫婦仲も微妙そうだし、南海子の子育て風景にもかなり問題がありそうだ。そんな中、いきなり南海子が工場勤めをしながらボロアパートに住んでいる輔の元を訪れ、互いに身体をむさぼり合うシーンが登場するのでビックリ！なるほど、これが島を出てから25年も経った後の信之と輔のなれの果てか……。

他方、中井美花は今、女優として有名になり、テレビにも出演しているようで、信之は時々それをじっと見つめていたが、南海子は信之と美花とのかつての関係を知っているの？

◆そんな状況下、信之は美花から電話があったため喜んでいそいそと出かけていったが、そこで美花から見せられたのは、輔からの事実上の恐喝状。今でも、美花のいうことには何でも従順な信之は、美花から渡された200万円の金には興味を示さないまま、コトの処理、解決を引き受けたが、こりゃ一体どんな展開に…？

そう思っていると、そこに小さい時から輔を虐待していた父親、洋一（平田満）が登場し、輔に対して小遣いをせびってきたから、話は少し複雑に。そして、輔の美花への恐喝事件が洋一を主犯とするものに変容していくから、アレレ……。また、そんな変化のため、信之の立てた戦略、戦術も大きく変わっていくので、本作中盤ではその展開に注目！

◆原作ではこれらの事件性はすっきりしているようだが、本作ではなぜかそらの混線（？）が顕著。こりゃ脚本が少しおかしいのでは……？もっとも、キネマ旬報12月下旬号の「REVIEW」での3氏の評価は星5つ、4つ、5つと高く、私の評価とは正反對だ。

なお、本作では導入部での耳をつんざくようなアップテンポの音楽が際立っていたが、これが本編に入っても何度も登場する。この音楽が「男たちの狂気」のサマを盛り上げる効果をもたらしていることは間違いないが、いくら何でも、こりゃ、やかましすぎるのでは・・・？

◆本作における殺人事件の展開は、ある意味で近時の邦画の傑作と言われている、『凶悪』（13年）（『シネマルーム31』195頁参照）や『怒り』（16年）（『シネマルーム38』62頁参照）の系譜を引き継ぐもの。しかし、なんせ平時は真面目に市役所を勤務している信之が無表情、無反応を貫いているだけに、その凶悪性が見えにくい。ラスト近くになって、なんだ、この男は美花の魔性のとりこになっていただけじゃないの、ということがわかるうえ、美花が便利な男をいつも道具のように使っていたのは、不感症だったのが大きな原因だったということがわかると、急激に冷めてしまうが、それでも本作では犯罪性、凶悪性の連続が興味のポイントとなる。

もっとも、殺そう、殺そうと準備していたのに、洋一が飲んだくれた挙句、勝手に死んでくれたのはラッキー。だって、そうなれば恐喝のネタに使われていた証拠写真が表に出ることもなくなり、美花も信之もこれにて一件落着。本作のストーリー展開を見ているとそうなるのが筋だが、そこらあたりがさて本作では・・・？

ちなみに、信之が死体を埋めるために掘っていた穴は一体どこにあるの？今時、そんな便利な場所がホントにあるの？さらに、あえてそこに輔をスコップで殴り殺して埋める必要はどこにあるの？私にはそこらあたりを中心に、本作は？？？

2017（平成29）年12月8日記